

## 東京学芸大学連続講演会 第10回

### 「若者NPOによる公民館運営への挑戦 ～エコミュージアム米原学へ向けて」

高見 啓一氏

NPO法人FIELD 専務理事



#### 米原市の紹介

皆さん、こんにちは。初めまして。滋賀県の米原市からやって参りました、特定非営利活動法人FIELDの高見と申します。よろしくお願ひ致します。今日のテーマは「若者のNPO法人による公民館運営と市民活動・生涯学習支援」ということでお話させていただきます。まずパワーポイント表紙に出ていますのは、うちの公民館スタッフ一同です。全員20代のメンバーで、私だけ男で他はみんな女性です。

最初に、米原市についてご紹介したいと思います。「米原市」と言われて、聞いたことがあるという方、おられますか？ 結構多いですね。東京駅から東海道新幹線に乗っていただきますと、ちょうど京都駅の一つ手前の駅で、今のところ滋賀県唯一の新幹線の停車駅となっております（新駅建設の議論もあるので「今のところ」としておきましょう）。ちょうど名古屋と京都の間にありますので、在来線でも京都から一時間足らずで着きますし、名古屋からも一時間十分でいけるちょうど真ん中の、よく言えば両方に近い、悪く言えば両方とも遠い、そんな場所に位置しています。中山道の宿場町でもありまして、清らかな水の流れている非常にきれいなまちです。地藏川という川が醒井という町に流れているのですが、その水の中には「梅花藻」という水中花も咲いています。自然豊かなところですよ。この水に手足をつけると、夏は冷たくて痺れるくらいの冷たさです。川底が澄んで見えるきれいな川なんです。

そして近年、合併をしております、いろいろな魅力をもったまちとなっています。ゲンジボタルがいたりですとか、伊吹山という日本武尊ゆかりの山があったり。また今、大河ドラマで『功名が辻』がやっておりますけれども、一豊・千代ゆかりのまちだったりもします。滋賀県の東北部にあって、東海道本線や北陸本

線、東海道新幹線の米原駅ということで交通の要所になっていますし、鉄道以外にも名神高速道路、北陸自動車道のジャンクションにもなっています。国道も8号線と21号線が交わっております、交通の要所として全国的にも有名なまちです。面積は221.3平方キロメートルで、人口は4万2千人の小さな市です。ここは2005年の2月に合併してできたまちです。旧の町名を米原町といいまして、坂田郡の4つの町が合併したものがこの米原市です。産業としては第二次産業と第三次産業が大半を占めております。第二次産業の割合も多くて、特にその立地条件を生かした米原工業団地というのが、米原インターの下にあるなどの特徴があります。

#### プロフィール紹介

そして「オマエは何者なのか」ということで、私の略歴をお話させていただこうと思います。私自身は、今一生懸命標準語で喋っておりますが、実は「東京モン」でございます。東京都生まれで、明治大学へ行きまして、そこで今専門でやっております社会教育の分野を勉強しました。といっても、社会教育というものも私自身専門の科目として履修したわけではなく、「社会教育主事課程」という資格取得制度が大学にたまたまありまして、その資格課程として受講しました。学生時代の時から学校教員になりたいというよりは、社会教育の方がどちらかという面白そうだなと、地域づくりとかまちおこしを是非やりたいと思うようになりました。そのきっかけになったのが「子どもと社会教育」という授業でした。その授業のつながりで都内の児童館にアルバイトに行きまして、いろいろな実践をしました。そこで中高校生のバンド活動を支援する立場になったときに、こちらが一方的に教える教育ではなくて、双方で学べるような教育って素晴らしいなと思ったことがきっかけになって、今の社会教育に考え方をシフトしていくようになりました。そのあと卒業後に滋賀県の米原町役場に行きまして、そこで企画の仕事をしていました。なぜ地方に出たかといいますと、至極簡単な理由なのですが、小さな市町村でいろいろな面白いことができるのではないかなと思ったからです。私自身米原町の役場に受かったのが偶然の偶然でして、当時世間は就職氷河期で、そう簡単にはまちづくりの現場へ行けるまいと、全国のいろいろな自治体の採用試験を受けました。そしてたまたま米原町に受かりまして、「こりゃ良かった」ということで今ここにいるという状況です。そこでは最初は社会教育ではなくて企画の分野に携わりまして、市民活動支援、い

までいうNPO支援ですとか、交通政策を担当しておりました。この頃に、たとえば交通政策にしても「市民の人と一緒に考えるような場を作っていこう」というスタンスで仕事をしておりましたので、今にして考えますと、その当時から公共のまちづくりということと社会教育の手法というのは結びついていくな、というふうに考えていました。

### 子育て支援NPO「FIELD」の活動

そして、私自身の今経営しておりますNPOを立ち上げたのが2003年のことでした。このNPO法人FIELDは、今はNPO法人を名乗っていますが、最初は任意団体として発足しました。最初は、発足の母体となった「ジュニアリーダー」の存在がありました。ジュニアリーダーとは国分寺市や小金井市にもあると思うんですが、いわゆる中高生の子が中心になって色々な子どもの事業、例えば子ども会の事業などを展開していく組織です。その中高生リーダー出身の子たちがいまして、そのメンバーと一緒に活動してきたのが法人立ち上げの経緯です。最初は「子育て支援」という考え方をメインに始めました。「子育て支援」「子育て支援」と近年色々な所で叫ばれていますけれども、FIELDは、子どもたち自身の自主的な育ちを促すために「色々な企画を子どもたちと一緒に考えていこう」「遊びも含めて子どもたち自身で活動していけるようなサポートに大人が回っていこう」ということで始めました。最初始めたきっかけとしては、中高生のリーダーを経験した今のメンバーが、大人になってフリーターとか色々していましたが、本当にやりたい仕事なかったという背景があります。しかしこのような活動は地域に必要だろうということで始めました。いつかこういう好きなことを仕事にできたらいいよね、という思いでNPOを目指して活動をしてきました。

では、どんな活動を実際に行っているかというご紹介をしていきます。1つ目は子どもの手による企画づくり事業です。子どもたちで子ども会の事業を考えたり、地域のイベントなどを考えているところです。子どもたちでするので非常に自由な発想が出てきます。地域の子ども会というと、大人の役員さんが一生懸命考えて子どもに提供するという形がどうしても一般的になってしましますが、子ども会本来の姿は子どもたちの自治活動ですので、不慣れながらも中高生のお兄さんお姉さんの手助けを借りながら、子どもたちが自分たちの発想を広げられるような手助けをしていきました。これ（パワーポイント写真）は何をしているところかとい

いますと、観光施設へ行ってその建物（歴史的建造物）を利用してお店屋さんをやっているところです。これは夏のイベントでかき氷屋さんをやっているところです。子どもたちでポップを作るなど、いろいろな企画をしました。

2つ目はたまり場づくりです。自由な発想を促すためには自由な遊び場が必要です。こちらの三多摩の方もプレーパークの活動が活発だと聞いておりますけれども、私どもではそういった活動がなかなかないので、公民館の一室を利用して、そこを「自由な遊び場・たまり場」ということで月に1度のペースで遊び場を設けていました。児童館などの青少年施設がない学区でするので、公民館を利用して、その場所に月に一回子どもたちに集まってもらって、いろんな遊びをやるよということにしました。ただ普通の体験教室みたいに「この日は〇〇をしますよ」といったふうな体験内容をこちらが考えるということはありませんでした。とりあえず集まってきて、「遊具もあるし、いろいろなものもあるけれども何を遊ぼうか」というところから考えさせたのが特徴です。

3つ目は、次世代リーダーつまり中高生の育成事業ということで、この中高生をどう育成していくかというのが大きな課題でした。イベントを手伝ってもらったり、小学生たちのよきお兄さんお姉さんになってもらえるよう、色々な地域活動への参加を促してきました。

「公の一端を請け負いながら」と見出しに書いておりますが、こういう活動をしていく中での私たちの財源については、なるべく行政や教育委員会、公民館などの事業と連携しながら、活動費をきちんと稼いでいこうという方針でやっていました。ですので、地域のイベントに中学生の店を出店したりですとか、教育委員会の文化財担当課の方で企画している文化事業をこちらでもらうなど、なるべく色々な機関・施設と連携したかたちで、実費をもらいながら実施してきました。

### 「子育て支援」から「市民活動支援」へ

そういうことをしていく中で、私たちのような若者の活動だけではなくて、その他にも地域にいろいろな特技や能力を持った方がおられますので、そういった方を集めて連携していけないかということで、4つ目の活動として「子育て支援」から「市民活動支援」の方向へ今シフトしていったところです。例えば、木の実を使っての工作を教えてくれるおじいさんなどいますので、私たち以外の団体さんにも活躍していただけるような促しもやってきました。まとめると私たちの一番

のテーマは、「お客さん側ではなく、企画する側の面白さ」というものをやはり地域（大人も子ども）に広げていきたいという思いです。それが今指定管理者として請け負っている公民館活動の基本理念にもつながっていきます。「子どもたちをお客さん扱いたくない」ということです。子どもたちにもいろいろな企画をしてもらい、その考えること自体の楽しさを味わってもらいたいというところから始まったわけです。また地域の大人の人も同様だと思います。公民館というひとつの場所があって、そういう中で地域のいいところだとか、自分たちのできることだとか、こういう特技を持った人がいるとか、そういうことを活かしていく喜びをもっとコーディネートしていけたらいいんじゃないかということを任意団体の時点で既に思っていたわけです。

以上のような視点を持ちつつ、行政や団体等とのタイアップ事業により、いわゆる「ヒモ付きの補助金」等に依存しない自主財源にて活動を展開してきた点が特徴です。ある意味がめつい任意団体だったと思います。そして、もうひとつのポイントが米原公民館をずっと拠点にしてきたということです。延べ10年以上というのは、実はジュニアリーダーとして彼女たちが活動していた時期をも含んでいますから。

### 米原公民館について

私どもが今指定管理者として請け負っています米原公民館についてなんですが、この米原公民館、以前は「米原町中央公民館」と呼ばれていましたが、設立されたのは昭和57年、今から24年前です。うちの館長は今24歳なので、うちの館長と同年です。同い歳なのに、館長は若くて建物は古いです（笑）ただしこの公民館は滋賀県内では開館が2番目に遅かった、つまり当時としては新しいわけです。滋賀県内で米原町と多賀町という自治体だけが公民館がなかったことになります。米原に公民館ができる母体になったのは地域の青年団の若い人たちや婦人会です。今はもう、これらの団体はそのまま存続はしていませんが、そういった地域団体が「やろうやろう」と言って盛り上がってきたのがこの米原公民館だったわけです。当時二番目に新しい公民館ということもありまして、デザインは当時としてはすごく斬新でした。全部うちばなしの壁になっていたり、今はすごく使いにくかったりしますが（笑）。建物は3階建てになっていますが、構想段階では夜でも非常階段から上られるようにしていたそうです。防犯上の問題からそれは実現しませんでした。なんでも「青年団の人たちが夜中でも集えるように」という

ことで設計段階ではそういう構想があったらしいです。それから、当時としては非常に斬新なのが喫茶コーナーです。「公民館喫茶」の構想もあったということで、これも実現しなかったですが配管だけがあります。「なんやこれ、じゃまな配管やな～」とみんなで言っていました。かつての社会教育課長に後で聞いてみると、こういう構想があつてこういう配管になっているんだよと聞いて感動。これはいつか配管を活かしてあげなきゃいけないな、なんて思っています。

今の話が出来たときの草創期で、次に黄金時代があります。米原の生涯学習・社会教育の黄金時代が平成10年頃です。この頃は旧の米原町で「生涯学習まちづくり」を推進して、市内で社会教育の取り組みに大分力を入れていた時期です。このときに生まれたのが近畿初の「出前講座」です。市民グループの要請で職員の方が出てきて、自分の担当分野の話を市民に対してする制度です。この出前講座の制度ですが、県内だけではなく近畿でも一番初めに始めたのが米原市の社会教育でした。そのほか「自治公民館」という地域の自治会の集会所で、週に何回かオープンして講座を実施したら市として助成するという制度も生まれました。やっている自治会とやっていない自治会がありますが、自治会ごとに自治公民館というものが生まれていて、地域の中でも学びの取り組みが行われるようになったというもので、これもまた珍しい取り組みです。

ちょうどこの頃に米原町内の子ども会の活動も盛り上がっていました。その頃にこの公民館に集っていたのが今公民館を運営している現FIELDのメンバーの子です。その子たちが中高生だった時がまさに「生涯学習まちづくり」の真っ只中でした。そのときにジュニアリーダーの活動も育っていきました。

その後ちょっと間が空きまして、平成17年に合併して米原市米原公民館になっていきました。この頃は縮小期、公民館から正規の職員は引かれていきました。どこの自治体でも同じだとは思いますが、厳しい財政難の時もありまして、なかなかそういった部局の方に十分な人員が与えられてこなかったということがあります。

### 指定管理者制度とは

次に、合併して米原市米原公民館が指定管理者制度に移行していった経緯についてご説明します。まず指定管理者制度について「大体知っている」という方手を上げてもらってもいいですか。（挙手を受けて）大体半分くらいの方はご存知ですね。聞いたことあるとい



う方も多いと思いますが簡単にご説明させていただきます。

これまでは地域の公の施設は、市役所（市当局）か、市が出資する財団（第三セクター等）といったところしか運営に携われませんでした。しかし、地方自治法の改正によりまして、特定の団体への委託というかたちではなく、原則公募で、民間企業やNPO法人も含めた外部の団体を同じレベルで検討して指定管理者として指定していくか、もしくは市の直営であるかという二者択一になったわけです。ですから、もし指定管理者という制度が当施設に導入されますと公募をかけるわけです。早い話が指定管理者制度というのは、自治体が提示する条件にもよりますが、民間企業もNPO法人も応募できますし、外郭団体も応募できます。公募の場合は市が検討委員会を設けて、コンペティションをして決定していく流れですね。その後正式に指定管理者となった管理者が施設の運営を担っていくということになります。もちろんこれも公募をしないところもありますし、地元の地域団体に限定して指定管理にしているところもありますので、一概には言えませんが、基本としては、民間企業ですとかNPO法人ですとか、従来の外郭団体以外にもこういう施設を請け負うチャンスが回ってきたということです。

### FIELDが指定管理者になるまでの経緯

そして、実際の経緯ですが、導入のきっかけになったのは行財政改革の一環だったということです。平成17年9月に公民館の条例が改正されました。すなわち「指定管理者が運営することもできますよ」というかたちで市の公民館条例が改正されました。平成18年4月から指定管理者による運営を開始したい、ということでさっそく平成17年10月に公募が開始されました。そして11月にプレゼンテーションを経た後に仮決定されて、12月に市議会で可決されて正式決定となりました。平成18年に入ってから3月にかけて協定締結の上で、米原市とNPO法人FIELDとの間で協議が進んだ、とざっくばらんに話していくとこういう流れになります。そういう中で、実は米原公民館の指定期間、いわゆる指定管理者として運営してもらいますよ、という期間は実は1年間です。本当は3年とか5年というのがひとつの目安と言われていますが、うちはなぜか1年ということになっています。

米原市内には、旧坂田郡の4つの町にそれぞれひとつずつ、全部で4つの公民館があります。それぞれが今指定管理者制度に移行していたり、これから移行し

ていく予定となっています。隣町の旧近江町というところにありました近江公民館については、米原公民館と同じく平成18年4月から指定管理者制度に移りました。その運営は、私たちと同じようにNPO法人（おみ地域人権・文化・スポーツ振興会）が担っています。近江の場合はこの近江公民館でずっと館長を務めてこられた方が退職されまして、地元の地域の方たちと一緒にNPOを作って指定管理者になったという事例です。もうひとつ旧山東町というところにあった山東公民館は、平成18年10月から、つまり先月に指定管理者になりました。この山東という地域で活動していた地域総合型スポーツクラブ「カモンスポーツクラブ」というNPO法人が指定管理者になりました。もうひとつが伊吹公民館という一番人口規模の小さい町ですが、そこの伊吹公民館というところも19年4月から指定管理者制度導入ということで、今公募がかかって審査中という段階です。今公民館の話をしただけでも、それ以外にも福祉施設とか色々な施設が米原市では指定管理者制度に移行していきました。この制度をとる町とらない町、色々あると思いますが、特に米原市では行財政改革を強く進めてきたということが導入の大きな理由ということになります。

### 新しい米原公民館の基本理念

それでは、実際米原公民館がどういう活動をしているのかというお話をしていこうと思います。まずうちの公民館の特徴ですが、運営していくときの「三本の柱」というものをコンセプトに打ち出していました。一つ目が、『『公民』館』、二つ目が「たまり場」、三つ目が「民活導入」という考え方です。

まず1つ目の『『公民』館』というのは、いわゆる「寺中構想」といわれる公民館の最初の基本理念を打ち出した寺中作雄の構想で、「地域課題の解決を担う公民のための館である」という基本に立ち返ろうということです。地域づくりを担っていく「公民」の人たちのための館というところに立ち返り、ただ受身型のカルチャーセンター的な講座を聞くだけでなく、学習で学んだことを活かしてどうやって地域づくりの担い手になっていただくかということを意識した講座展開をしていこうというコンセプトです。

2つ目は「たまり場」ということで、私たちFIELDという団体が大切にしてきた子どものたまり場の考え方を、大人の施設にも公民館において応用していけるのではないかと考えました。つまり人と情報がフリーに集まる自由なたまり場を作っていくことで、子どもから

お年寄りまで日常の学習相談などを経て、地域の活動につなげていけるのではないかとこの考え方です。これは先ほど任意団体の活動についてお話しさせていただいたことと同じことで、まずは自由に考えられる場所づくりということをコンセプトにしました。

3つ目は「民活導入」。民間に移って1番大きいメリットが「精鋭メンバーを集められる」ということです。みんな何らかの資格を持っている若いメンバーが集まりました。そして、施設も新しい発想で全部活かしました。ハード面もメンテナンスはどうしても行政の立場にありますと個々に入札にかけていかなければならないのですが、それを一括にしてトータルに管理できるようにすることでコストも抑えました。

### 専門性の高いスタッフ陣

再度申しますが、一番大きな特徴として厳選されたスタッフ陣が揃っているという魅力があります。順番に紹介していきます。これは館長です。見た目貫禄のある(?)館長ですが24歳です。館長就任当時は23歳です。この人がジュニアリーダーをしていたときからずっとリーダーをしていた人です。それともう一人が業務主任でずっとやってもらっている堀内です。この人は、私たちで運営する以前から米原公民館の臨時職員として働いていました。5年間臨時職員として働いていて、中学生などの子どもたちを公民館に入れていこうと頑張ってくれた子です。今年から自分たちの経営になるということで能力を發揮してもらっています。当時は何も資格は有していなかったのですが、今年大阪大学へ社会教育主事の資格を取りに行ってくれて、今は有資格者になっています。次が私です。私はここでは会計担当です。それからボランティアコーディネーターというものを一人おいています。彼女はデザイナーとして活躍して、皆さんにお配りしているこういった刷り物や、プレゼンの資料、公民館だよりも作ってもらっています。この子にはコーディネーターとして地域の市民活動団体やNPOのコーディネート役を務めてもらっています。次に臨時職員ですが、この子は今教員を目指しておりましてその勉強をしたいということで、子どもの担当をもらっています。右下の人が、米原公民館で働いてみたいということで、ボンと飛び込んできた人です。飛び込んできたうちに、こういう仕事を是非したいということで、臨時職員のかたちで入ってもらって頑張ってもらっています。来年からの即戦力になってもらいたいと思っています。司書の資格を持っている人にも入ってもらって

います。公民館には図書室もあるのですが、この人はずっと別の仕事をしていたので、ぜひ好きなことをやってみないかということでスカウトしました。最後のこの子(犬)は非常勤職員犬のラッキーちゃんといっています。2歳8ヶ月のポメラニアンで最年少スタッフです(笑)この子はうちの公民館で非常に重要な役割を果たしていて、ここで飼っているわけではないのですが、うちの公民館にいつも来てくださるスポーツ団体の会長さんが飼っているワンちゃん、招き猫ならぬ公民館の「招き犬」として活躍してくれています。

あとは基本的な話ですが、休館日は月曜日、祝日、年末年始です。利用料金は部屋や時間など区分によってさまざまです。減免の措置がありまして、市民の登録団体については減免で部屋をお貸ししています。使用料ですが、公共的団体と言われるところには減免の措置をしています。これもまだ整理ができていないので、いろいろ問題になったりしています。登録団体数は現在70団体です。来館者数等データについては、昨年度実績では44,849人の方が来館されています。今年はまだ途中です。どうなるかわからないですが、指定管理者に移行して4月～10月の約半年で34,000人の方が来館しています。講座の実施状況は資料の上半分をご覧ください。事業の予算としては、公民館全体の事業費については2,700万円となっています。この金額は職員の人件費、建物のメンテナンス、個々の事業費、消耗品等全て含んだ金額です。このうち委託料としてもらっているのは2,470万円、残りは利用料金等で賄うという仕組みになっています。

### 米原公民館のリニューアル

では、米原公民館の活動状況について写真でご説明していきたいと思います。「ビフォー & アフター」ということで、実は3月31日の夕方から深夜に至るまで、1階部分の模様替えを行いました。

まずロビーについてです。最初はパネルなどが置いてあり非常に殺風景な感じで、四角いテーブルがどんと置いてあるだけの場所でしたが、リニューアルに伴い丸テーブルを配置して、喫茶コーナー風に。なるべく空間を広く使おうということで、パネルばかりだったロビーからパネルを全部撤去しました。そしてこんな風に壁側にいろんな作品を展示しました。

次に公民館の事務所の隣に空き部屋がありましたがここには以前何もありませんでした。荷物置き場などに使われていたのですが、今ここを地域のNPOやボランティア、市民活動の「共同オフィス『たまらん』」とい

うかたちにリニューアルしました。印刷機などを全部集約して、パソコンなども配置しました。いろんな人に使ってもらっています。

そして一番大きく変わったのは事務所です。事務所は公民館入口を入りまして左側にありますが、これまでここにパンフレットスタンドが置いてあって、受付机があって、中に入ると事務机が並んでいるといういわゆる普通の事務所だったんですが、ここをがらっと変えました。それまでロビーにあった四角いテーブルを職員のテーブルにしています。そして事務所入ってすぐの場所に畳を敷いています。これは何のためかという、色々な人がくつろいだりたまれるスペースに変えたわけです。ここのテーブルも職員だけが使うとは決めていません。月に一回座る場所を変えたりしますし、時にはテーブルの上をちょっと片付けると、市民の人との対話のスペースに早変わりしたり……というような感じになっています。

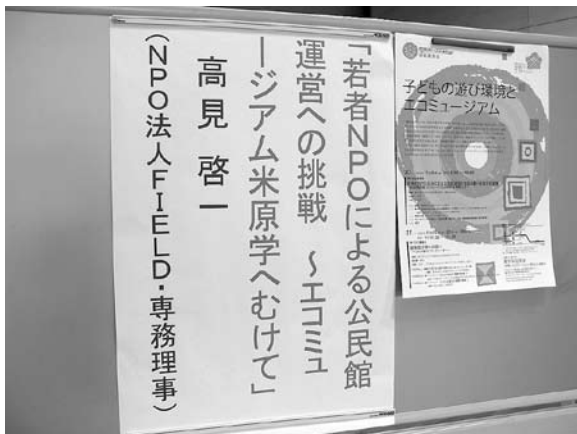
#### 市民のための自由な場所作り

そして普段の様子です。午前中は乳幼児を連れてお母さんがよく来館されます。図書室が公民館の2階にあるので、本を借りに来たついでにこのようにロビーで本を読んでくつろいでいたり、さっきの畳のスペースでうちの職員と戯れながら遊んでいたりします。散歩コースにしてくれている人もいて嬉しいですね。事務室を地域の人たちと自然に触れ合う場所にしたいなという思いを持っていましたので、こういう雰囲気です。毎日やっています。休日にはお弁当持ちで来る小学生もいます。

もう一つがうちの公民館の「名物」ですが、中学生が多く来館することです。これは部活帰りです。だらっとくつろいでいるところで、こちらの子たちは友達と待ち合わせているところです。ここで待ち合わせをしているというので、「どっか行くん？」と聞いたら、「いや、

公民館でしゃべるだけやで」ということで、事務室にあるソファで喋っているところです。こっちはうちの職員と何か喋っているところです。そして、高齢者の方々もこの事務所に入ってこられます。例えば、この方はカラオケサークルのおじいさまなんですけれども、元国鉄職員だったということで、いろんな昔の写真を持って来て、そこにいた中学生や職員にいろいろ教えてくれているところです。そのほかロビーをこのように談笑できるスペースにしたおかげで、曜日によってはドカッとみんなここに降りてきます。事務室で喋っている人もいれば、ここに降りてきてここでいろんな談笑をしたりして過ごされている方もいます。また湯茶を自由に飲めるサービスやコーヒーサービスなどを設けましたので、そういうところも利用してもらっています。そして、先ほど登場したラッキーくんです。この子が非常に大活躍してくれていて、この子が入り口のところにちょこんと座ってくれているおかげで、いろいろな人が事務所のほうに来ます。そうすると「あつ、ラッキーちゃんいるわ」ということで職員との会話も生まれますし、時にはこうやって高齢者と子どもの会話のきっかけになったりします。全然知らない者同士でも、このワンコがいるだけで地域の人同士が和んだりします。次にこれは面白い写真ですけれども、そんな事務室です。こっちのソファではカラオケサークルのおじいちゃんたちが談笑していて、畳の方では子どもたちが遊んでいるというのが一つの部屋で繰り広げられています。こっちでは職員の事務机で中学生が職員と一緒に宿題をやっていたりですとか、こっちのテーブルでは恋愛相談をしていたり、と思いきやこっちでは職員ではなく、地域の人たち、環境ビジネスをしているひとと自治会活動をしている人が環境のことについて喋っている様子です。もちろん知らない人同士でしたがこういうところにつながります。

この公民館にたまってくる人たちですので、普段本当にいろんな活動に協力してくれます。中学生も飾り付けを手伝ってくれたり、子どもたちも公民館だよりを折ったり掲示物を作るのを手伝ってくれたりしています。たまに「仕事をくれ〜」とも言ってきます。そんなわけでイベントを一緒にやったりするわけです。江戸っ子の私は「東京名物もんじゃ焼き」を滋賀でやりたいなど以前から思っていて、これを公民館の「みんなで屋台村」という事業で実現した様子です。小学生もわたがしコーナーを担当してくれたり、中学生たちもテレビのインタビューに答えているところです。





## 地域の人を呼び込む仕掛け

では公民館としてはどのような仕掛けをしているのかですけれども、場所を作るだけではなく、人を呼び込むことも必要だろうということでいろんな事業をやっています。これは地域のグループ「花クラブ」の奥様方に協力してもらって、「ハーブティーサービス」をロビーで実施しているところです。また芸術家さんとか工芸作家さんも地域にいますので、そういう方に体験コーナーをやってもらったりしていますし、七夕のときは地域の人に竹を切ってもらって、七夕飾りを子どもたちが作っている様子も見られます。また従来やっていたパソコン講座というものも形を変えました。パソコン講座はやってもやっても、どうしてもついていけない人が出てきてしまうので、それならばうちのコンセプトに合うようにできないかということで始めたのが「ネットカフェ」です。公民館で月2回「ネットカフェ」と題して、コーヒーを飲みながら自由にパソコンをいじれる日を設けています。「ネットカフェ」といってもほとんどワープロの基礎「あいうえおカフェ」だったりしますが(笑)。夏には浴衣を着ての「浴衣デー」をやったりして楽しんでもらっています。

このように市民の人には地域の拠点としてもっともっと公民館を使ってもらって、私たち職員はむしろ交流の場所作りにシフトしていこうということを中心にしています。公民館といいますと、事業の方を重視してしましますが、普段から私たちが一番大事にしているのが「場所づくり」です。一回まず入ってきて、「あっいいな、入りやすいな」と思ってもらえるような場所づくりが大事なのかなと思っています。その次にある事業はひとつの手段であり、もう一つ先に行くためのステップなのかな、と思います。

## 「エコミュージアム米原学」

では先のステップである事業についてです。ここまでの話は3本の柱で言うところの「公民の館」というよりは「たまり場づくり」の部分が大きかったですが、今度は公民の館として地域の人たちの参画を促していくというお話です。今回の現代GPのテーマにつながる「エコミュージアム米原学」という取り組みをご紹介します。「エコミュージアム米原学」という名前前でやっていますが、「エコミュージアム」とは簡単に言いますと、地域の人材ですとか歴史、文化などの地域の素材をもう一度見直し、地域を「まるごと博物館」として捉えて、それをまちおこしに活かしていこうというものだ、と私は理解しています。米原市も「米

原市エコミュージアム構想」というものを掲げております。先ほど米原市のご紹介をいたしました、自然もたくさんありますし歴史も色濃く残っているまちということで、米原市としてはエコミュージアムの部分を大きく推進しています。そういった市としての大きな計画に対して、是非うちの公民館でも具体化に協力できないかということ。これも市政の流れの中に公民館を乗せて、公民館の重要性を高めていこうという一つの作戦というわけです。「米原公民館もまちづくりをする力を持っているよ」ということをアピールする意味で「エコミュージアム米原学」という名前をつけているわけです。中身自体は具体的に言ってしまうえば園芸講座だったり、歴史講座だったりするのですが、敢えて「エコミュージアム米原学」という言い方をしています。一つが自然編、一つが歴史編ということで二つのテーマを持ってやっています。

## 自然編

先ほどお話ししました共同オフィス「たまるん」に登録してもらっている団体で「滋賀の園芸福祉研究会」というNPO法人があります。その団体の人たちと協力して「市民農園」での活動・講座を一緒にやっています。研究会で農園を持っておられますので、その農園を活用してうちの公民館事業に組み込んでいただいているわけです。一度やったのが園芸フォーラムです。「グリーンアドバイザー」の方が研究会におられましたので、グリーンアドバイザーの方による花づくりの講座をやったり、京都に桂高校というところがありそこでは「ウォードの箱」というほとんど水を使わずに植物が育てられる装置、環境問題に対応した研究をしており、それを聴かせて頂くフォーラムを実施しました。この研究はスウェーデンの「水のノーベル賞」という賞にもノミネートされています。このように地域の人たちと専門家の人たちがこういう講座で交流して、地域の園芸活動や景観づくりに誘っていくというかたちでコラボレーションしています。市民農園の活動に公民館として関わっていただくことで、自然を学べるような講座が展開できます。花摘みですとか、収穫祭ですとか、なかなか公民館単独ではできないようなユニークな事業を、NPOと連携することで実現しています。逆に、公民館事業をきっかけに、このNPOの会員になった一般の市民の方も何人かおられます。この写真は子どもたちがジャガイモ掘りを体験しているところです。こういうことをなかなか体験する機会がなかったので「私たちのまちにもこういう資源があるよ」ということを伝え

ていけたのではないかと思います。今度は豆の収穫を予定しているのですが、これも豆を収穫するだけではなくて、これを今度は料理講座という形で公民館事業に活かしていきたいと考えております。次の写真は押花の様子です。これも花を摘んだだけではなくて、地域で特別なことをしなくても、庭先の花でもできるよということをやったりしています。また秋には自然の素材を使った料理教室ですとか、春には山に登ろうかと思っています。地域の山に登って地元の山野草とか葉草といったものを学べる講座を予定しています。

### 歴史編

次は歴史編です。歴史編は、面白い話なのですが、カラオケサークルの方との雑談がきっかけで生まれた事業なんです。米原駅は非常に長い歴史を秘めた駅で、開業から百何十年と経っている古い駅です。国鉄時代の米原駅周辺は今と違っていて、国鉄職員がいっぱいいて、非常に栄えたまちだったということを実際に知っている生き字引の人たちがいます。実はこのカラオケサークルのおじいさんは、昔新幹線の運転手をしていましたので、「SLから電力車、新幹線までわしは全部乗ったぞ」というすごい方です。その話を僕たち職員だけで聞くのはもったいないので「ぜひ市民の人たちにも喋ってくださいよ」という企画で生まれたのがこの歴史編です。

他にも国鉄で働いておられた方がたくさんいて、普段公民館ではコーラスサークル部員であったり、グラウンドゴルフの会員だったりという顔なんです。それまではみな「サークルのおじいさん」という感じだけで見えていたのですけれども、いろんな話を聞いているうちに「この人はすごい経歴を持っているんだな」というような話も聴かせてもらえます。自分で米原周辺の古い住宅地図を描き起こして研究されている方だったりですとか、私どもの職員のつながりで鉄道ライターをやっている方や歴史研究家も交えて、市民の方々に大きな場で喋ってもらおうという仕掛けをしました。それが「古きよき時代の米原駅を語ろう」というフォーラムです。

これは非常に好評だったのですが、聴くだけで終わってしまったのは面白くないということで、次に「思い出の品を手に分史を語ろう」というものをやりました。今度は、もうちょっとお互いに深め合おうということで、人数は少ないですが、元国鉄職員の方を中心に集まって昔の品を持ち寄って喋り合うような講座です。例えば昔の貴重なブレーキハンドルを持っておられるよう

な方がいたり、昔の信号機の実物も見せてもらいました。これは記録に残して行こうということで、地元雑誌にも寄稿しました。

さらには、学ぶだけではもったいないということで、次はギャラリー企画に突入したわけです。「語って学んだ成果をみんなに見せよう」ということで始まったのが「米原駅思い出ギャラリー」です。昔の住宅地図や駅前の風景写真など、みんなの持っている資料を展示したところ「懐かしい」という声が出て大評判でした。子どもたちにも人気でしたし、市の観光協会で開催している「新幹線高速試験車両一般公開イベント」というものがあるのですが、そこにも「出張展示」として持って行ったりですとか、テレビや雑誌にも登場しました。カラオケサークルのおじいさんとコーラスグループのおじいさんが突然「時の人」になっていました。このようなかたちで「エコミュージアム米原学」を実施したことで、「人材を活かしていく」という点と、「地域の素材を見つめなおす」という点において非常に意義があったと思っています。参加型のまちづくりにつながりました。

### 協働のまちづくり

共同オフィス「たまるん」では印刷機、事務机、共同ロッカーの利用や、スタッフによる活動相談を各種市民活動向けに実施しています。運営支援、広報支援、情報コーナー、共同オフィスをやっています。ここをきっかけにいろいろな団体がここに集まってくるようになりました。例えばスポーツクラブの団体さんがここで活動をしているわけですが、この会長さんは樹木医の資格も持っていて地域の人にいろいろなことを教えてくれたりしています。あと面白いのが「折紙飛行機士協会」ですが、ここには9歳の子から60代の方まで講座を受講していただいて世代間交流が生まれています。他にもエコミュージアムと関係していますが、「LOHAS」を推進しているグループは中山間地域で若者たちのコンサートイベントをしようということで、うちを拠点に活動されまして、伊吹山麓の集落で、音楽を通した交流会を里山と都会をつなぐ企画として実施されました。このように公民館を拠点にいろいろな人材が色濃く生かされているという状況があります。左下の写真は滋賀県の環境情報誌です。実は環境団体がひとつここに登録してくれていて、私たちの法人とその団体とが連携しまして、この環境情報誌の制作業務を請け負ったのです。デザイン料もきちんと県からもらって、取材に行ったりしながらこのような雑誌を作っています。直接私たちがエコロジーに関わる仕事



をやっているわけではないのですが、私たちが持っている部分を専門でやっている団体と手を携え、いろいろな成果を出している。まさに公民館が持つ一つの可能性ではないでしょうか。このように住民パワーでいろいろな企画が進んでいくわけですね。他にも社会教育のフォーラムをいろいろな人に集まってもらってやったりですとか、園芸関係の団体と連携して花づくりの講座をやったりですとか、時には高校生たちと一緒に鉄道模型展をやってロビー一面に走らせたりなんかもしています。子育て支援も地域の方と一緒に……この写真は中高生の子育て体験ということで、沐浴体験をしているところです。これも中高生の子育て支援講座で終えるのではなく、大人向けの子育てサロンと一緒に実施ことで、中高生の子育て体験とお母さんたちの息抜きの場を一緒にするというコラボレーションが生まれるなどの工夫につながっています。

次の写真も公民館の音楽サークルさんの協力で、世界的なミュージシャンがうちで演奏してくれることもありました。また地元で畳屋さんがいまして、その方の協力による畳コースターづくりですとか、地域の健康推進員さんによる食育講座などなど……地域課題に対応するために地域の力を借りています。こちらは地域の社会保険労務士さんに提案頂いた年金教室といった感じで、公民館職員が何かをするのではなく、地域の方の力を借りながらやっている状況です。音楽のコンサートも地域の人たちと一緒にやっています。事業PRのためにテレビに出てもらうのも地域の方々に、「かなわんわ、かなわんわ」と言いながらみんな出るとノリノリだったりします（笑）

私たちの仕掛けとしては何があるのかと言いますと、何よりも職員と市民と一緒に混ざり合うのが大事だと思っていて、研修も市民と一緒に取り組んでいます。例えば、救急救命講習を職員だけが学ぶのではもったいないので市民の人も呼んだところ、親子で参加してくれる人がいたり、地域の方や自治会の方が参加してくれたり非常にいいものになったと思います。しかも消防署の協力ですので受講料は無料です。消防訓練も講座にしてしまいます。法定訓練ですので職員は必ず参加するんですが、それだけではもったいないですし、来館者も「いざ」となったら協力してもらわないといけませんから、一緒に消防訓練に参加してもらったりもしました。参加人数はそれほど多かったわけではないのですが、テレビで取り上げてもらったりしまして、結果として講座に来ていない人の啓発にも繋がることができました。それからさいたま市の公民

館長さんに来ていただいて講演会をしてもらいましたが、これも職員研修兼市民への講演会となっています。また先ほどうちの職員が社会教育主事の資格を取りに行った話をしましたが、その学習内容についての報告会を市民の人にしました。もちろん参加者は少ないですが来てくれる方はちゃんといるんです。そういった意味のある事業をなるべくしていくようにしています。

## エコは「エコノミー」へ

まとめとなりますが、今後は経営的視点が大事になってくると思っています。たまり場を作っているいろいろな人が集まってきたのはいいのですが、今度は団体や人材の育成部分、発掘した方がいいが今後どう活かしていくかです。エコミュージアム事業のような活動に発展させていくような視点が大事なのかなと思います。例えば先の歴史編は非常に分かりやすかったと思います。最初は事務所での雑談がきっかけで始まった講演会、講演会がきっかけではじまったお室の語り合い、語り合いから始まったギャラリーの展開、ギャラリーからはじまったまちおこし事業への出張……こういうかたちで人材をどんどん育成していきたいです。また発信するだけではなく、入ってくるものも入れていかなければならないと思います。「エコはエコノミーへ」と書きましたが、先ほどのギャラリー関係では、市の区画整理課から事業委託を受けての第二弾の展示会を予定しています。市では現在米原駅周辺の区画整理を進めていますので、その啓発をしたいということでうちに打診がありました。それならおじいさんたちがやってきた歴史編と、未来のイメージパースと一緒に展示しようということで、米原駅前の「過去→現在→未来」というかたちで展示。さらにプラスして、いま子どもたちとやっているのがブロックで作る啓発遊具です。開発後の駅前の想像模型を作成しています。

こういう風に、公民館というところを舞台に市や各種機関のいろいろな事業を入れ込んでいきたいと思っています。ちゃんと、人件費（手間賃）も含めた委託料をもらえるかたちで進めますので、ひとつひとつやってきた学習が「経営体」というかたちで生かしていけたらいいなと、まさに「エコはエコノミーへ」です。「エコミュージアム」という考え方には「エコロジー」だけではなく「エコノミー」の要素も含まれます。私たちのやっているほとんどの事業が、あちこちからいろいろなお金や素材を組み合わせているので、市民活動についてもそういう視点を入れていきたいなと思っています。さっきの自然編で動いていたNPOさん

も公民館の事業ということがひとつの情報発信の機会になって実績になってきていますので、県や他市の助成金などを取りに行っている状況です。そういうことで、県内各地に発展していくときに、ここが一つの拠点、土台となってくれたらいいなと思っています。

### 数字で見る米原公民館の成果

「数字で見る米原公民館の成果」の表をご覧ください。4～10月までの7ヶ月間の数字ですが、来館者数が直営時代から7,409人伸びています（直営期よりも30%増）。なぜこのように一気に伸びたかといいますと、その要因は一般来館者の増加です。従来は「貸館利用者」がメインだったわけですが、今はこのように用事がなくても寄れる場所になったということで、来館者数を大きく延ばすことが出来ました。「より入りやすくなった」、「雰囲気良くなった」ということを証明する数字だと思います。次に「印刷機の利用件数」ですが、公民館での市民の方の印刷機利用は直営時代からやっていたことですが、共同オフィス「たまるん」に置くことで「どんどん使ってください」とPRしたことで利用件数が70%増加しました。普段の活動に使う印刷も公民館でやったらいいのではないかとということで、公民館を拠点的に使ってもらおうよう打ち出しました。そのおかげで、市民活動の支援機能として数字に現われたのではないかと思います。この二つの数字が「たまり場」「公民の館」として発展したということのひとつの証明になっていると思います。新聞記事への掲載状況でも、オープン前から10月までに公民館がらみの記事が71本載っています。単純計算で「2.9日に1回」掲載されている計算になります。私たち職員が今一番心がけているのは情報発信です。「地域にこんな面白い人がいるよ」とか「地域の人たちがこんな面白い取り組みをするよ」とか、どんどん発信することが職員の側でしなければならないことかなと思っています。



### なぜ今公民館とまちづくりなのか

最後に「今なぜ公民館とまちづくりなのか」というお話をして終わろうと思います。なぜ公民館がここまでするのかですが、社会教育法に基づく施設なのだとすることがまず一番大きいのです。社会教育法第20条を読み解きますと、公民館の所管分野はとっても広い。けれども、突き詰めてみれば実際生活に即するところ、すなわち地域のまちづくりに関連するようなどころ全てに関わってきます。公民館は学習だけの施設ではないということ意識しなければいけません。「寺中構想」を私たちは大事にしていまして、「なぜその公民館が地域に必要なのか」という基本に立ち戻らなければいけないなと思っています。「寺中構想」で言われた公民館の現代的意義「平和主義を身に付けた人間を育成する」、「文化の誉れ高い人格をつくる」、「郷土の産業興し、郷土の政治を建て直す」という要素は、まさに地域づくりの部分。学ぶだけではなく、学びを通じて平和の問題ですとか文化の振興や地域おこしに結びついた場であればならない、という原点に立ち戻る必要があるわけです。寺中さんの言う「公民」とは、「公民という言葉は自己と社会との関係についての正しい自覚を持ち、自己の人間としての価値を持つとともに、一身の利害を超越して相互の助け合いによって公共社会を完成の為に尽くすような人格を持った人、またはそのような人格を求める人の意味である」ということ。公民館ができたのが戦後間もなくですから、そのときの考え方ですけれども、現代でもNPOですとか「公共の担い手」は、まちづくりの重要な課題になっていて、寺中さんの考え方は今にも十分に通じるわけです。ここをきちんと打ち出していくことで、「なぜ公民館が税金で運営されるのか」、「なぜ公民館に減免措置があって無料もしくは安価でいろいろな人に利用してもらえるのか」、ということの根拠になるだろうと思います。指定管理者制度の視点だけで見えてしまいますと、どうしてもコスト削減の方に視点がいてしまいますけれども、むしろ私たちのような団体が請け負ったことで、お金ではない施設のもつ重要な部分を見据えた上で、それからマネーに結びつけるかたちで考えていったらいいのではないかと。そのための費用対効果を公民館に求めていくというのは、十分あるべき視点かなと思っています。またこちらの「三多摩テーゼ」ですが、私たちの目指すものに近く、素晴らしい考え方だと思います。「公民館は住民の自由なたまり場、集団活動の拠点、住民にとっての大学、住民による文化創造の広場」という4つが「三多摩テーゼ」で言われていますが、その

原点に「たまり場」が一番に来るということを私たちの手法の部分で生かしていきたいなと思っています。

とはいいながらも公民館の指定管理者制度をめくっては全国で色々な問題が出ています。実際に公民館の法的責任がそれで担保できるのか。価格競争を無理に促すことで雇用の安定性を落とすのではないか。行政が公民館に職員を配置することでフロント窓口としていろいろな地域ニーズを吸い上げることが出来たのに、行政の側から手放すことで失ってしまうのではないかと……といった問題のほか、制度の導入そのものが不透明で、地域のニーズを無視してやっている自治体も多いということもあります。うちの市でもまだ市民の間では指定管理者制度に対する誤解も多いですし、それを取り除いていかなければならないのかなと思いますが、やはり透明な運営は大事だと思います。裏を返すと、私たちがどういった視点でこれをやっていったらいいのかという話になるわけです。

公民館に民間活力を入れたことで公民館の原点にもう一度回帰しなければいけない。理論・原則をきちんと踏まえた運営をしたいということで、常に社会教育の勉強をさせてもらっているところです。経費を削減した分は雇用・質の充実に回して行きたいなと思っていて、職員の質は現在高めているところです。今年には社会教育主事の有資格者が2名になり、来年は3名になる予定です。そして住民と行政のつなぎ役もしていかなければいけません。やはり市民と行政との接着剤になるのがNPOの使命なのかなと思います。あと求められるのは透明な運営です。公民館は役所の本庁以上に市民の方に中身が見える施設だと思いますので、どんどん事業にも参画してもらって市民の人たちにも公民館で活躍してもらいます。包み隠さず市民と一緒に色々な課題を共有していきたいなと思っています。それはひいては公民館だけじゃなく、米原市全体のまちおこしに影響してくるのかなと思います。地域課題は行政課題でもありますから、公民館というところがまちおこしを担えたら、行政もほっとけないだろうと思っています。すなわち市民と行政の「パートナーシップの最前線」になりたいなと思っています。NPO法人だからこそ、こういった原点にもう一度立ち返ってきたいなと思っていますし、それが求められていくのではないかとと思っています。

最後に「米原エコミュージアム」ですが、お聞きになって頂いてお分かりだと思いますが、「市民力を活かす」がねらいです。地域の力を活かす、それから高齢者の活躍の場をつくる。2007年問題が叫ばれています

が、地域の中で昔の仕事の話などをどんどんしてもらって、輝いてもらいたいなと思っています。もう一つが自然や歴史については「残していこう」と意識しないと、どうしてもその価値に気づきにくいものだと思いますが、そういったものを保存する役割を私たちが担うのかなと思います。そういったものは市・行政単独ではなかなかできないものなので、私たちみたいな存在がいろいろ発信していったらいいのかなと思います。

それから経費の問題もあります。市民の方にある程度動いてもらわないと、私たち職員だけではどうしても出来ませんし、運営経費にも影響します。偉い先生を呼んで講演会をしてもらうというよりは、自分たちがまず持っているものを出し合うところからスタートすればいいんじゃないかといことで、そういう意味で今はあまり事業費は使っていないです。逆に経費をプラスに持っていけないかなということで、いろいろな企画を市や県、各種機関と連携させることで、また別のチャンネルからお金を持ってくるのが出来るかなと思っています。さらには、公民館を市の施策の中軸に持って行きたいと思っています。どうしても公民館や出先機関というと、市の施策の中核に据えることは難しいですね。そこで「エコミュージアム」といったような看板を敢えて掲げて、市の施策にこれだけ提案できるよという力をどんどん見せていくという意味で、この「エコミュージアム事業」は意味を持っています。もうひとつが「世論づくり・味方づくり」です。最後に市民の方にどれだけ輝いてもらって、市民の方にどれだけ私たちの運営に協力してもらえるかということがありますので、もっともっと市民の方と世論づくり・味方づくりを発揮できたらと思います。企業や研究機関との連携ですとか、なるべくいろいろなところとコラボレーションしていきたいなと思っています。

新しい時代だからこそ、原点に立ち返った公民館運営をしていこう。ひとつの地域の持続可能な社会づくりに私たちも貢献できる。その原点になるのは楽しい毎日を仕事にしている職員の力とその理論なのかなと思います。長くなりましたが、以上で終わらせていただきます。(会場、拍手)

#### <質疑応答>

司会：先に質問を受け付けて、まとめて高見さんにお答えいただく形にします。

質問者A：私は地域社会研究所に所属しているものです。全体としての取り組み方ってとても素晴らしくて、ただ、実は気になったことがあります。1つは高見さん



は市民の方という形で言わば、市民と自分達はという、区切ったような言い方をなさったんですけど、恐らく、公民館の役割の中で、かなり大きい部分というのは市民の意思という問題部分を考えるということだと思うんです。実は、普通の市民が自分達の自治力を高めていくというのがちょっと少なかった気がいたします。これは、親密感、当に、公民館というのはもしかすると最終的にはNPOでもなんでもなくて、市民が自分達自身で運営して決めていく場になっていくが最終的には一番良いだろうと思っています。それについて教えてください。

**質問者B:** NPO法人多摩川エコミュージアムの事務局をしております。具体的なことを聞きますが、新聞記事に指定管理者としての収入が2,700万円程度と書いてありますが、若い職員がたくさんいらっしゃるの、実際それでは人件費だけで終わってしまうのではないかなと思いました。それ以外の収入、受託事業などがどの程度あるのかお差支えなければ教えてください。因みに、私どもは川崎市の方から管理・運営で500万円しかもらっていませんけれど、それ以外大体1,000万円程度を様々な受託事業でやっておりますので、教えてください。

**質問者C:** 私は子どもの遊びに関心を持っている者です。子どもの遊びを幼稚園とかそれから学校図書館とかいう風にたくさん持っているんですけども、どうもその子どもの遊びが子ども自身の自主的な活動として立ち上がっていないことが多い。それは冒険遊び場においても、もっと子どもたちが自主的に遊びを繰り返していく方法はどこにあるんだろうかと、いつも思っていて、学校だと遊びを教えてしまうし、その辺の所で、お宅ではどういう風に子どもの遊びを展開しているのか聞きたい。私はずっと遊びをやっていて、今、聖徳大学で保育の勉強をしています。

**質問者D:** NPO法人自然文化史研究会の菱井といいます。もともとその地域で育ってきた人たちと公民館との付き合いはどうやっているのか教えてください。

**質問者E:** 本学で社会教育を担当させていただいている倉持と申します。お聞きしたいのは2つあって、1つは動かしていくためにはスタッフの方の若い皆さん達の力。高見さんも素晴らしいのですが、高見さん1人ではできないのではないかと思います、その職員の方々に、もし専門性があるとしたら、何か共通して、気をつけていること、あるいは、ここが自分たちの拠り所と力だとかがあるのか。もう1つは、高見さんご自身が実現するにいたったきっかけ、経験、安定した公務員という

職を捨ててまでの覚悟で続けてきたバックグラウンドがあるのかということを知りたいです。

**高見氏:** いろいろな質問がありまして、皆さんやっぱり専門家だなと感じました。すごいなあと思う質問ばかりなので、大変嬉しいのと同時にちょっと緊張しています。どうしても本音でしゃべれる部分と、記録に残さずにしゃべりたい部分もありますので、とりあえず、今はある程度事実関係だけお話しておきたいと思います。

自治の関係は、深い問題なので、最後にさせてもらって、事実確認関係からお答えしようと思います。まず、人件費以外のお金をどうしているかというご質問に対してなんですが、500万円を川崎市からもらって、それ以外の収入が1,000万円もあるという話をいま聞いて、とてもそんな方に偉そうに言える話は全然なくてむしろ私たちが教えてほしいというくらいです。一応先に数字だけ言いますと、市からのお金が2,470万円。プラス利用料等が200万円ぐらいで、2,700万円です。あと、もろもろの独自事業を引っぱってきて大体300万円というところ。法人予算としてほしい3,000万円を予定しています。資金運用でひとつ大事にしていることは「金額の大小」ではなく、なるべく「チャンネルを多くしたい」と思っていることです。今小さい仕事でも、地域に必要な事業はいずれ絶対大きくなるということを考えながらやっています。ただし、今もらっているお金はやはり行政が多いです。まず一つ大きいのが、滋賀県の財団からもらっている120万円のお金です。これは「NPO支援事業」として、コーディネーターの人件費等に当てています。人件費にも使える貴重な財源ですので重宝しています。かつ、米原市は滋賀県湖北地方というところに位置するのですが、この地域はNPOの拠点施設が県内で唯一なかった地方だったので、そういう意味でも期待・応援してもらっています。それと、さきほど申した子どものたまり場事業に42万円。中高生の子育て体験活動に36万円、これは両方とも国からのお金です。それと後はもろもろの細かい事業です。さっき言っていた環境情報誌が37万円。これも県です。ただ、それぞれ管轄部署が異なりますので教育委員会管轄だったり環境課管轄だったり、ほかもろもろの事業も実はいろいろな機関・部署を絡めながらやっています。来月には市と連携した展示企画で40万円くらい入ってくるということで、色々お金を入れながらやっている状況です。

もう一つのご質問で、子どもの遊びのお話ですね。どういった形で展開しているのかということなのですが、私たちが一番大事にしているのは「仕掛けない」

ということですかね。先ほど申しました「地域子ども教室」に応募してはいるのですが、実は応募している内容が、他の団体とは大きく違ってまして、体験活動をするのではなく「畳を敷いたあのスペースが子ども教室です」と言い切っていますね、うちは。年間の体験講座的なことは、うちではあまり仕掛けないのですが、むしろ地域のサークルさんなどに手伝ってもらいながら、そのつど色々な事業をやっていきます。ただ、子どもたちはいつ来てくれてもいいので、地域子ども教室の開催日数は公民館の開催日数とまったく一緒の回数ということになります。だから、職員も無理はしていないのです。どんな遊びが展開されるかといいますと、本当に自由です。たとえば折紙飛行機などは、一度教えたなら自分たちで折り出して、自分たちで遊び出しますし、週末に、折紙飛行士協会の講師の方が見えたりすると、皆で表に出ながら「博士、博士」と言いながら一緒に折紙飛行機を折ったりしています。最近では「秘密基地」づくりも始めまして（これは職員が知らないうちに始められたのですが）、非常階段の下にダンボールを敷いてやり出すという……これもまた見守っていきこうという動きになっていますけれど。それと、中高生が頻繁に来ますので、自然といつの間にか中学生が遊んでくれるようになります。中学生たちがいろいろとボランティアを経験してくれてくる子たちとも交わりますので、色々な遊びを覚えてきていますし、職員との関わりよりも中学生との関わりを大切にしています。やっていることは外でボール遊びをしたり、中でつみ木で遊んだり、本当にそんな大したことではないですし、また、うちは特にゲーム機類を禁止していませんので、ゲーム機で遊ぶこともあります。ただ、最近はゲーム機で遊ぶことは若干減りましたね。やはり色々な人との出会いがあって、色々な経験ができることで、徐々にいろいろ気付きだしているのかなと思います。

次の自然文化史研究会の菱井さんからのご質問で、10年やってきた人とそうでない人、その付き合いはどうなっているかということですね。まずスタッフの内訳ですが、うちは館長と業務主任、この二人が10年間実際活動してきたのですが、それ以外のメンバーでは私とデザイナーの子が役所にちょっとおりました。あとは他市でボランティアをしていた知り合いのつてです。最初の時点では、業務主任が元公民館の職員をやっていたことが長いからということで、来館者の顔が少しずつつながります。だんだん他のスタッフも慣れてきますと、新しい顔がつながってきます。また、

私自身も市役所職員をやっていてよかったなあと思うことが多くて、企画部局や児童福祉部局に関わっていたときの地域の人脈やノウハウが活かされています。他にもみなそれぞれ若干でも地域活動に関わっている感があったので、新しい人材とつながっていく際にはその力が生かされているのだと思います。ただし、それぞれに得意・不得意の分野があります。NPOの運営から公民館の運営まで、そして現場・裏方色々ありますので、いろんなつながりをもってやっています。誰もがオールマイティではないなあと思います。

それともう一つ。倉持先生からご質問がありました、スタッフの専門性に共通している力ですね。それはなんだろうなあのご質問を受けている間、考えたのですが、結局のところみんなバラバラですね。持っている能力も全然違いますし、私もいまここでしゃべっていますが、私ができるのはこうやってしゃべるだけです。実際色々な事業をやっていて、今般の主役である「エコミュージアム」も、私の担当事業ではないのです。仕事を取ってくるのは営業さん、仕事を実施するのは職人さん……という分業体制なので、私はお金をとってきたり、お金を管理したりそれだけなのです。本当に尊敬すべきは、今日公民館で働いていてくれる他のスタッフなんです。では、その中で何が共通しているのかと思ったとき、「共通」というわけではないのですが、やっぱり皆チームワークがいいです。人間関係も日本全国の職場を見回しても最高じゃないですかね。本当に普段から笑い声の絶えない職場ですし、みんな本当にわだかまりなくしゃべることができる職場でもありますので、お互い対等に意見が出し合えるところが大きいと思います。あと共通している力といえは「みんなで仕事をしている」ということですね。それと何らかの形でみんな一つは「目標」を持っているのが大きいと思います。職員のことについては『月刊 社会教育』12月号に執筆・掲載予定ですので、皆さん是非ご購入ください。国土社から発売されています。

最初に飛ばしました「自治の力」の話です。私もご質問の趣旨に全く同感でございまして、実は私たちの公民館、ひいては地域全体に足りない部分だと思っています。私たちが常に意識してまして、今やっている事業は本当に駆け出しでしかないと思っています。ですので、とても三多摩地域にある大学へ出てきてしゃべれるようなレベルの話では全然ないのです。ただし、私たちのレベルですら、米原の社会教育・地域づくりには途切れてしまっているのが実状です。「米

原公民館ではこんなレベルまでやっているの？ こんなレベルのことまで市民はやらないよ」と言われるところからスタートです。米原という地域の中では「NPO」という言葉も出ていなかったですし、市民の人たちとの協働のまちづくりはこれからという段階ですから、出来ることからスタートしなければいけないのかなあと考えています。このスタートラインから徐々に徐々にやっていかなければいけません。ただし、傾向として足りていないこと・今やるべきことはあるのです。まだ足りない部分がたくさんありまして、例えば平和の問題ももっとやらなくてはいけないとか、もっと市民の側から拳がってくる不満などをテーマにしたものが出てこないといけない（エコミュージアムやNPO育成などを結構やっていますけれど）とか、そう思っているのです。

私は、本来の公民館とは、市民の立場に立った「反骨精神」のある場所でないと思っています。今は、活動資金も地域からの信用もこれからという段階ですので、ある程度米原市としての施策意向に沿ったような形で展開しています。しかし、将来的には市民の方から、「行政のやり方に任せておけない」「自分たちで学習して実践しよう」という動きになってほしい。それくらいの「市民力」をつけていきたいと思っています。例えば、最近「枚方テーゼ」で有名な枚方市で公民館がトップダウンで首長部局に移管されることが起こりました。対して市民側からは勉強会が開かれたり、住民投票の請求がされたりですとか、そういうことが起こりました。現時点での米原ではこういう動きはあり得ないと思います……逆に言うと平和なまちなのでしょうけどね。よその町で、市民の方が自主的に参加している今回のようなフォーラムに寄せていただくたびに、つくづく思います。

はい、そして最後に私自身のバックグラウンドですね。一番大きいのはやはり社会教育主事課程で勉強したことです。私の恩師は立柳聡さんという方だったのですが、本当に、あちこちへ出ていく先生でした。とにかく学生をいろんな所に連れて行くのです。しかも授業の代替として行くのです。それで私もあちこちの社会教育現場へ連れて行ってもらいました。立柳先生自身も実は元児童館職員でしたし、先生とつながりのある現場職員さんとの出会いから、私自身も児童館の企画とか、そういうこともやらせてもらうことができました。時には全国レベルの研修にも行かせてもらって、そこで色々な仲間と出会いました。立柳先生を出発点にして、世界を大きく広げていただいたのです。

私自身が「学び」で変わってきたという経験がありますので、それがやっぱりバックグラウンドにあるのかなあとと思います。その結果として、他のみんなにも同じように体験してもらいたいと思っています。色々な人たちと出会って、色々な力を発揮していく中で、一つ一つ何かを見つけてもらえたら……。そう、それは子どもたちに対しても、市民の人たちに対しても、そしてスタッフのみんなに対しても……。出会いはチャンス。どの人に対してもそう思っています。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

#### <講師プロフィール>

高見啓一（たかみけいいち）

NPO法人FIELD 専務理事

1978年生まれ。東京出身。明治大学卒。京都橘女子大学大学院博士前期課程修了。2001年度より滋賀県米原市役所（旧米原町）に5年間勤め、地域振興・公共交通・児童福祉などを歴任。

市民との取り組みで近畿初方式の「乗合タクシー」を導入したほか、各種まちづくりの受賞歴も多数。2006年度より地元NPO法人の20代のメンバーとともに、米原公民館の指定管理者に。

「公民の館」「たまり場」「民活導入」の3つを柱に、若者が運営する公民館ということで全国から注目されている。